

金融を含む「マッチング・ビジネス」に期待
SNSによるネットワーク賦活効果

インターネットを利用したソーシャル・ネットワーク・サービス（SNS）と経済の関係を考える場合、規模の経済であるネットワーク外部性という観点も、当然ながら考慮すべきである。

いわゆるSNSを実際に利用してみると、多くの人が面白い現象に気づくようだ。それは一言でいうと「自分の世界の小ささ」である。自分とは関係性がまったく別だろうと思っていた人が、想定もしていなかった関係で自分とつながっていた、といった経験などである。

たとえばSNSで小学校の同窓生とつながっていたが、自分の親戚の結婚相手と大学のサークルで友人同士だった、などなど。それにより思いもかけないような関係性が復活したりする。私自身も昨年、40年ぶりに中学生時代の米国人ペンフレンドとSNSで再会した。意外に「世界は狭い」ということなのである。

まだインターネットなどが発達する以前にも、一体どのくらい「世界は狭い」のかという問題意識により行われた実験があるという。

約半世紀も前に米国のスタンレー・ミルグラムという心理学者が、任意の人を

対象に、手紙を知人から知人へと人づてに渡してゆくと何人目で届くかという実験を行った結果、中継者数の平均は5人前後だった、とのことである（メラニー・ミッチェル著、高橋洋訳『ガイドツアー 複雑系の世界 - サンタフェ研究所講義ノートから -』紀伊國屋書店、2011年、376頁など）。ここから「世界は狭い」という認識が生まれたのだという。

そうした人間世界の「狭さ」において、SNSは関係性に活力を与える、つまりネットワークを賦活する役割を果たしているのだろう。むしろポジティブな面ばかりではないのだが、通常の友人関係だけにとどまらない、関係の広がりや深化の可能性を与えるものに、SNSはなっているのではないだろうか。

こうしたことからSNSは、単に人が集まったり見に来たりする場として広告収入を得るといったビジネスを超え、大きく進化していく可能性を秘めていると思われる。SNSの運営者からのみならず、アプリケーション提供者や一般利用者からも、さまざまなアイデアにより高度な利用可能性が生まれてきそうだ。

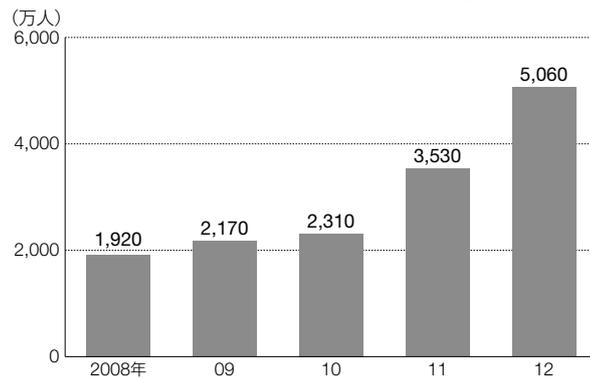
特に活用が期待できるのは、マッチングをする分野だろう。

米国で巨大金融機関の救済問題が焦点となったとき、「大きすぎる」ということより「複雑につながっていることが問題なのだ」(too connected to fail)との指摘もあった。

だが、人間世界のつながりの複雑さと比べれば、今の金融機関のつながりなど、まったく複雑ではなからう。世界の金融機関同士の中継者数など2前後だろうが、さほど複雑ではあるまい。

今後のネットワーク・サイエンスの発展により、複雑な関係性を上手に賦活し、金融を含むマッチング・ビジネスが、大いに進化することを期待したい。

■図 日本の「ソーシャルメディア人口」推計値の推移



(注) インプレスR&D インターネットメディア研究所「インターネット個人利用動向調査2012」(『インターネット白書2012』にも収載)により、SNS(ソーシャル・ネットワーク・サービス)とマイクロブログの利用者数(閲覧のみも含む)。各年5月時点の推計